

シリア・パルミラ遺跡の墓制

杉原 美智久

パルミラ(Plmyra)遺跡は、古くから地中海とユーフラテス河とを最短距離でつなぐ隊商交通の要所として栄えた都市である。シリア・アラブ共和国のシリア砂漠に位置するパルミラ遺跡は、現在でも東方の首都ダマスカスと西方のデルゼロールをつなぐ観光交通の主要ルートにあたる。紀元前1世紀から3世紀頃にかけて繁栄を極めた「隊商都市パルミラ」の建築様式を人々に披露している。

繁栄当時パルミラに建造された墓は、これまでに基礎痕跡を残すものも含め350基以上が確認されている。さらに、その形態から三つの様式が設定されている。現在のビルディングに外観が類似し地上に建造される塔墓、神殿のように華麗な装飾を施し塔墓同様地上に建造される神殿墓、地下に建造される地下墓¹⁾である。

これらの墓は各様式ごとに共通した制約基盤に則って建造されている。

1. 塔墓はパルミラ遺跡が立地するすべての地形、杉原が設定する四地形である、平地部・緩斜面部・急斜面部・山頂部すべてに建造する。
2. 神殿墓は平地部または緩斜面部にのみ建造する。
3. 地下墓は山頂部以外すべての地形に建造する。

さらにその開口方位(出入口の方位)・立地環境には、全様式に共通する現象が認められた。

塔墓・神殿墓・地下墓を通して開口方位に極端な片寄りが生じ、特に北方、東方、南方方位(現地磁気)に集中して開口、西方をむく墓は希である。また墓を建造する地域には、厳密な事前調査に基づく検討がおこなわ

れた可能性が強い。太陽によって生じる山の影、特に日の出に生じる影に対し十分な配慮がなされ、その結果、影の及ぶ地域に墓を建造することはない。さらに日中を通して墓同士においても他の墓が影に隠れないよう十分工夫がなされている。

これは太陽の光と当時のパルミラ人、さらには埋葬される死者との間に重要な取り決め、慣習といった伝統的制約が存在していたことを示唆するものであり、当時のパルミラ人がもつ宗教観によるものであろう。

一方、各様式の立地には、いくつかの特徴が認められる。

a. 塔墓と神殿墓に共通する特徴

地上に建造される墓、塔墓と神殿墓には埋葬としての機能の他に、隊商都市を形成する上で重要な目的をも担っている。

塔墓はパルミラの都市と外界とをつなぐ隊商交通と密接に関連し、入り組んだ谷やどこまでも平坦な砂漠といったパルミラ周辺の複雑な環境にあって、パルミラまでの進入経路を確保する。特に山頂に建造する塔墓には遠方にあるパルミラまでの進路確認を容易にする機能を有し、斜面および平地に建造する塔墓は入都に至る進路の微調整と最終決定といった重要な役目をもっている。

比較的都市と離れた地点からその機能を発揮する塔墓に比べ、神殿墓はパルミラの都市に直接連絡している。墓同士軒を並べて隣接し、また、向かい合うように開口することの多い神殿墓群からは、当時の街道を容易に推定することができる。しかし、ローマやポンペイにみられるような街道とは異なり、石敷きで舗装されることのなかったパルミラの街道では、その範囲や方向性を明瞭にする上で、神殿墓に嫁せられた第二の機能は完成当初より重要視されていたと考えられる²⁾。

b. 地下墓の特徴

その機能を色濃く残す地上建造物に対し、地下建造物である地下墓には機能という面からの目立った特徴はなく、埋葬施設としての機能に徹した

ものであるということが出来る。しかし、現状の地下墓地上部にやや盛り上がり認められることから、建造当時には現在以上に小高い小山を呈していた可能性も考えられ、他の墓同様の二面性を否定することはできない。

当時のパルミラ人達が墓に求めたもの、それは安らかな眠りとしてだけでなく、安住の地ともいえる「永遠の家」³⁾としての、常に生きた時間と空間との共有を願ったものである。

死してなお現世と接しようとする彼らの痛烈な願いは、隊商交通を円滑におこなうために最も重要な機構、すなわち隊商を都市へと導きそして送り出すといった一種のナビゲーションシステムをパルミラにもたらし、この優れたシステムによって円滑な隊商交通が約束されたのである。埋葬された死者たちは現世に生きる人々に対し、過去から現在を、さらには遠く未来をも通じて隊商交通の一端を担い見守ることによって、現世における永遠の命を獲得することに成功するのである。

註

1) 地下墓にはさらに、平地または緩斜面を掘り下げるものと、急斜面を掘りこむもの（一般にいう横穴墓）とに大別することが可能である。両者の詳細な因果関係、時期的変遷については今後の研究にゆだねるが、一般的に急斜面に建造されるそれより、平地または緩斜面に建造される地下墓のほうが規模も大きく、壁面や彫刻などの室内装飾も豊かであるものが多い。将来的には、区別して分類する必要があるかもしれないが、パルミラ研究者の間では両者を地下墓と総称している。本稿でもその見解による。

2) パルミラ研究のこれまでの成果から、塔墓と神殿墓が建造される年代に差異のあることが判明し、西暦140年頃に境にそれまでの塔墓建造が途絶え、にわかに神殿墓建造へと移行する傾向があるといわれている。

したがって、パルミラの街道は、一時期にすべてが整備されたのではなく、順次、外部から細部へと移行していったと考えられる。

- 3) 「永遠の家」という表現は、パルミラ人達が自らの墓を建造する際に刻まれる碑文に頻繁に認められる。